

ペルム紀キャピタン期「上村寒冷化事件」: 古生代から中生代への転換開始

The Capitanian (Permian) Kamura Cooling Event: the beginning of the Paleozoic-Mesozoic transition

磯崎 行雄 [1]; 川幡 穂高 [2]; 蓑島 佳代 [3]

Yukio Isozaki[1]; hodaka kawahata[2]; Kayo Minoshima[3]

[1] 東大・総合・広域; [2] 東京大学海洋研究所; [3] 産総研

[1] Earth Sci. & Astron., Univ. Tokyo Komaba; [2] ORI, U of Tokyo; [3] AIST

九州中央部高千穂町上村の海山頂部起源中部ペルム系石灰岩中で識別された高い炭酸塩炭素同位体比が継続するインタバルとその意義について報告する。+5パーミルを上回る同位体比はほぼ300-400万年継続し、海洋出の生物生産が高かったこと、さらに二酸化炭素の消費による寒冷期の出現を記録している。それ以前の安定した同位体の経年変化から大きく逸脱した状況は Guadalupian-Lopingian 境界からはじまり、トリアス紀前期の終わりまで続く。このような炭素循環パタンの変化は P - T 境界より約 1000 万年先行して始まった。古生代から中生代への変化はこのような遷移期間をへて起きた。